

第199回（令和2年7月12日施行）

1 級原価計算・工業簿記

第1問

「原価計算基準」の内容に準拠した○×選択問題を出題しました。単に「原価計算基準」の文章を丸暗記するのではなく、各種用語の正確な意味や実務上の取り扱いなどについても意識して学習してみてください。

1. 頻出の問題ですが、「原価計算基準」が対象とする経営上の範囲を問うています。「原価計算基準」は経常的に行う原価計算制度を対象としており、意思決定会計等で用いられる原価情報は検討の対象外となります。
2. 主要材料は原則として継続記録法で計算します。継続記録法による消費量の把握が困難な場合、もしくはその必要がないものについては棚卸計算法の適用が容認されています。
3. 総合原価計算において、正常仕損は、特別に仕損費の勘定を設けることはせず、完成品と期末仕掛品に負担させるものとします。
4. 異常な状態を原因とする価値の減少、例えば異常な仕損、減損、棚卸減耗等は非原価項目として扱い、製品の原価には算入しません。
5. 財務諸表作成に信頼できる基礎を提供し、記帳の簡略化、迅速化に役立てられることも、標準原価の重要な目的の1つになります。
6. 等級別総合原価計算では、各等級製品の数量と等価係数をかけて積数を計算し、それをもとに完成品総合原価を計算します。この場合、完成品総合原価¥2,470,000のうち、S級製品3,000個に按分される金額が¥1,170,000になるため、S級製品の完成品単位原価は@¥390となります。

第2問

製造業における仕訳の問題です。すべて過去問題を参考に出題しています。

1. 材料消費価格差異に関する問題です。計算自体はシンプルですが、差異の借方、貸方の区分を明確に理解できているかが論点となります。
2. 貸率差異に関する問題です。こちらも前問と同様、差異の金額の把握は容易ですが、借方差異か貸方差異かを明確に理解できているかが論点となります。
3. 部門別計算に関する問題です。全ての補助部門費は第2次集計によって最終的に各製造部門に配賦されることとなりますが、その基本的な計算方法を問うています。
4. 工程別総合原価計算において主産物と副産物が分離する場合の仕訳を問うています。副産物に関しては、その評価額を副産物勘定とすることに注意してください。
5. 販売取引において値引きが行われた際の基本的な仕訳を問うています。
6. 工場会計が本社から独立している場合の工場側の仕訳を問う問題です。未払賃金給料は本社側に設けられているため、工場側の仕訳には出てきません。そのため、工場側は本社勘定で処理することとなります。

第3問

直接原価計算による損益計算書の作成と、損益分岐点および目標営業利益を達成するための販売数量を問う問題です。直接原価計算に関する問題については、変動費と固定費の金額を適切に認識し、変動製造原価のみで製造原価を計算できるかがカギになります。

本問の計算の流れは下記の通りになります。

- I. 売上高 = $\text{¥}4,400 (\text{販売単価}) \times 2,200 \text{ 個} (\text{販売数量}) = \text{¥}9,680,000$
- II. 変動売上原価については、製造数量にもとづいて単価を計算する必要があります。
1 個当たりの直接材料費 (変動材料費) : $\text{¥}2,040,000 \div 2,400 \text{ 個} = \text{¥}850$
1 個当たりの変動加工費 : $\text{¥}3,672,000 \div 2,400 \text{ 個} = \text{¥}1,530$
1 個当たりの変動製造原価 = $\text{¥}850 + \text{¥}1,530 = \text{¥}2,380$
変動売上原価 = $1 \text{ 個当たりの変動製造原価} \times \text{販売数量} = \text{¥}2,380 \times 2,200 \text{ 個} = \text{¥}5,236,000$
- III. 変動販売費 = $\text{¥}220 \times 2,200 \text{ 個} = \text{¥}484,000$
- IV. 固定費 = 固定製造原価 + 固定販売費 + 一般管理費 = $(\text{¥}5,918,000 - \text{¥}3,672,000) + \text{¥}324,000 + \text{¥}418,000 = \text{¥}2,988,000$

次に、損益分岐点の販売数量を求めるために 1 個当たりの貢献利益を計算します。

$$1 \text{ 個当たりの貢献利益} = \text{販売価格} - 1 \text{ 個当たりの変動費} = \text{¥}4,400 - (\text{¥}850 + \text{¥}1,530 + \text{¥}220) = \text{¥}1,800$$

損益分岐点における販売数量は、貢献利益 = 固定費となる数量なので、 $\text{¥}2,988,000 \div \text{¥}1,800 \text{ 円} = 1,660 \text{ 個}$ になります。

次に、目標営業利益 $\text{¥}1,512,000$ を達成するための販売数量を計算します。これについては、貢献利益 = (固定費 + 目標営業利益)となる数量なので、 $(\text{¥}2,988,000 + \text{¥}1,512,000) \div \text{¥}1,800 \text{ 円} = 2,500 \text{ 個}$ となります。

第4問

本問は、工程別総合原価計算の問題です。単純に 2 つの工程を経て総合原価計算を行うというだけでなく、第 1 工程の完了品を半製品として保管、販売する、第 2 工程の終点で副産物が分離されるなど、工程別総合原価計算で起こりうる多くの要素を含めた問題になっています。第 1 工程は平均法、第 2 工程は先入先出法と、各工程によって月末仕掛品の評価方法が異なっているので、条件設定にも注意してください。

過去にも類似の問題が多く出題されているので、条件の違い、出題形式の違いなどに留意しながら学習してみると良いかと思います。